

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

射撃で東京五輪へ

一発一発に思いを込める

◎文学部 4年次生
八川 綾佑 さん

0.1mmの戦いに全神経を集中する——。関西大学入学後間もなく開催された国際射撃連盟主催大会で、日本選手として28年ぶりのジュニア種目優勝の快挙を達成した体育会射撃部の八川綾佑さん。経営の神様の名言を胸に、自身と向き合いながら「射撃」で2020年の東京五輪出場を狙う。

八川 綾佑—やつかわりょうすけ

■1996年、大分県由布市生まれ。大分県立由布高等学校卒業。体育会射撃部所属。高校から射撃を始める。2015年6月にドイツで開催された国際射撃連盟「ISSFジュニアカップ大会」において、男子10mエア・ライフル60発競技で優勝。趣味は釣りと映画鑑賞。



千里山キャンパス養心館1階の射撃場で、八川さんは日々練習に励んでいる。「気持ちが落ち着く感じがするので、小さいころから緑色が好きでした」と、黒と白を基調に、差し色のライトグリーンが鮮やかなジャケットとパンツからなる「射撃ウェア」に着替えながら、八川さんは穏やかに笑んだ。0.1mm単位で競う射撃の特性上、生地や厚さや固さなど服装の測定基準も厳格だ。

「JPN」「RYO」の文字がひときわ目を引くチェコ製の射撃ウェアに身を包み、靴ひもを結び終えた八川さんは、ケースから丁寧にエア・ライフルを取り出した。「ファーストチャンスで撃つことを心掛けています」とサイト(照準具)をのぞきこむ目は、10m先の標的をとらえた。地元大分県にある由布高等学校入学後の体験入部で初めて射撃に触れた。「その時はビームライフルでしたが、射撃にはロマンがある」と思い、その魅力に引き込まれました」と当時を振り返る。

これまでライフル、エア・ライフル競技の試合に出場し、国内外の大会で数々の成績を残している八川さん。射撃は標的を離れた位置から狙い撃ちし、着弾点が標的の中心に近いほど高得点を得るルール。構えも立射、膝射、伏射の三姿勢があり、八川さんは立射を得意とする。「心の揺れが競技の成績に出てしまう。常に自分との戦いに面白さを感じます」。日ごろから座禅や瞑想も取り入れ心のバランスを保つという八川さんは、試合時には自身の好きな言葉を胸に秘めて競技に集中する。「松下幸之助さんの山は西からでも東からでも登れる。自分が方向を変えれば、新しい道はいくらでも開ける」というような名言がありますが、この言葉がとてつもなく支えになっています。何かを成し遂げる方法は一つではなく、いろんな方法からアプローチしてみる大切さをこの言葉から学びました。

父親が技術者だった影響もあり、幼少期からさまざまなパーツを組み合わせて物を作ることが得意だった八川さんは、「頼に当

てるチークピースを輪郭に合わせて削って調整したり、自分専用の道具を作ったりすることが好きですね」と言う。大分県でナショナルチームが合宿をする際には足を運び、日本を代表する選手達に積極的に話を聞きに行ったという。「ナショナルチームのコーチや選手の方々には射撃のフォームなど、いろんなことを教えていただきました。特に『射撃は自分に合ったスタイルを見つける』と教えられた言葉が心に残っています。知識と技術は人の話を聞いて、そこから自分に合った方法を見つけていく。何でも積極的に試してみることを心掛けています」。旺盛な探究心、物おじしない積極性、そして関西大学射撃部の恵まれた環境の中で、ロマンを追うように射撃の腕を磨いた。

目指すはやはり2020年に控える東京五輪。「関大射撃部の自由な雰囲気や成長させてもらいました。東京五輪出場は狭き門ですが、射撃を通じていろんな人の意見に耳を傾けることの重要性を学びました。この「道」を歩んできたからこそ得られた「経験」もありますね」と話す。春からは地元大分県に戻り、社会人として働きながら、射撃を追求し続ける。五輪出場を狙い、更には地元で射撃の人材育成にも携わっていききたいと語る八川さんの道はまだ続く。

10m先の標的を立射で狙う。不安定な姿勢でエア・ライフルをコントロールするのは大変難しい



女性の声を形にする

女性視点の機能美を追求するウェア開発者

◎ミズノ株式会社 グローバルアパレルプロダクト本部 開発・ソーシング部 LS・ゴルフアパレルソーシング課 一木 緑 さん 工学部 2003年卒業

女性が輝く社会——。あらゆる業界で女性が少なかった時代に、女性ならではの視点と自身のプレーヤー経験を生かしてスポーツ衣類やシャツなどを開発する一木さん。特許取得件数も多く、2児の母親となってもなお、第一線で活躍し続けている。



スポーツ製品開発で培われた機能素材や設計が取り入れられたおしゃれなウェアはタウンユースにも最適

大阪の南港にある地上31階、地下3階からなるミズノ株式会社大阪本社で、一木さんは勤務している。1階には、大正後期の野球選手のユニフォームや昭和初期の牛革クラブなど、1906年の創業以来、1世紀以上にわたるミズノ製品が並ぶ「ミズノスポーツロジエギャラリー」が広がる。エントランスのロゴマークを背に、「ミズノならではの強みが反映された製品作りを心掛けています。スポーツをする時だけでなく、日常でも着てもらえるような高機能の製品を開発し続けてきました」と、ブランドの重みと誇りを自らに言い聞かせるように紡いだ。

関西大学工学部に入学すると、スポーツと研究に打ち込んだ。中学時代はソフトボール部で5番・遊撃手として活躍し、高校時代は規定により女子の公式戦出場が認められていない硬式野球部で、二塁手として練習に参加するほどスポーツが好きで一木さん。大学では、「経験者が少なく、大学から始めても上が狙える」との理由でラクロス同好会に入部した。当時は女性誌でファッション特集が組まれるなど、「オシャレ女子大生」を象徴していたラクロスで、チームの司令塔として関西選抜に選ばれるなど存在感を發揮。「ラクロスは華やかな見た目とは逆で、動きも激しくけがが絶えませんでした」と苦笑いした。一方、学業では医薬品工学研究室に所属し、抗がん剤の開発に打ち込むなど充実の4年間を過ごした。「開発職を希望して就職活動をしている中で、『スポーツが好き女性開発者が欲しい』との熱意を感じました」と、当時は女性開発者がほとんどいない状況だったミズノに入社した。

現在、グローバルアパレルプロダクト本部開発・ソーシング部 LS・ゴルフアパレルソーシング課に所属する一木さん。入社直後から、会社の期待に応えるように能力を發揮した。紫外線の透過や照り返しの軽減により、皮膚の露出部分の日焼け防止が期待できる繊維製品の特許を出願。その後も、スポーツ用衣類や運動用衣服の発明で立て続けに特許出願し、取得した。体のラインを美しく見せる水着「ボディーメーカーキャップシリーズ」は、性能はもちろん、ネーミングも反響を呼んだ。自らのスポーツプレーヤー



一木 緑—いっき みどり
■1980年、大阪府貝塚市生まれ。私立西大和学園高等学校卒業。2003年関西大学工学部卒業。同年ミズノ株式会社入社。スポーツウェアなどの開発に携わり、女性ならではの視点で取得した特許も多い。趣味はフットサルとスポーツ観戦。

としての経験と女性としての視点、更にはフィットネスジムやプールに赴き女性の声に耳を傾けた。「プールでウォーキングをする人からは『上半身が水面から出ているので冷えてしまって…』との声もあったので、上半身部分は生地の繊維を長くして空気層を作ることで保温効果アップにつなげました」。また、スポーツ用ブラジャーの開発では、ラクロスの社会人チームの仲間を試してもらい、率直な意見や感想を製品に反映させた。

家族揃ってスポーツを愛する一木さんは、「どんなに苦しい時でもスポーツには人を元気に、明るくできる力があります。スポーツを通じて外に出て、居場所を見つけて笑顔で元気になってほしいです」と語る。現役アスリートさながらの輝きを放つ一木さんは、「今の私があるのは関西大学での4年間のおかげです。研究や部活を通じて多くのことを学びました。子育てしながら社会で活躍する大学時代の友人と会っては、お互いを刺激し合っていますし、本当に宝物です。女性は結婚すると家事や子育てなどで多忙ですが、それらをこなしながら、第一線で活躍できるように自分も成長していきたいですね」と柔和な表情を見せた。

